

故大島義彦先生を偲ぶ会

(三回忌)

日時
場所

平成十七年九月十八日(日) 正午～
ホテルメトロポリタン山形 四階 霞城

偲ぶ会次第

一、開会のあいさつ（佐本敏秋先生）

一、大島夫人あいさつ 大島扶美

一、黙 祷

一、献 杯（斎藤英彦先生）

一、ビデオによる略歴紹介

「親愛なる大島義彦先生」

一、偲ぶ言葉

たくさんの方々に語っていただきます

一、思い出のメロディー

一、閉会のあいさつ（長男）大島裕紀





司会されている佐本敏秋先生



山形済生会病院院長浜崎允先生が設立されたYoshihiko Ohshima memorial PET/CTセンター

平成17年9月18日、ホテルメトロポリタン山形にて大島義彦先生を偲んで三回忌が催されました。

100名を超える人々が参集され、小白川整形外科クリニック院長の佐本敏秋先生の司会のもとに、様々な領域で故人とかかわられた人々から、ありし日を偲ぶ言葉やエピソードが語られました。しみじみと縁を温め合い、心が充ち満ちる会となりました。

佐本敏秋先生の開会のあいさつ

只今から、「大島義彦先生を偲ぶ会」を開催いたします。

本日はご多用のところ、また、遠路にもかかわらず、ご臨席を賜りまして、誠にありがとうございます。

司会を仰せつかった佐本です。

不慣れではありますが、ご臨席の皆様のご協力を得て大役を全うしたいと考えております。よろしくお願いいたします。

「光陰矢のごとし」と申しますが、早いもので大島義彦先生が去って、3年目になります。先生とは多くの会でご一緒させていただきましたが、大概遅れてきます。いつもはらはらさせられましたことを思い出します。

本日の会にもそろそろかの地からお着きになったと存じます。

それでは皆様とともに、大島義彦先生を囲んで、
彼を偲んで、思い出を語りたいと存じます。

この会が、故人のありし日を偲び、故人に関わった人達はその縁を温め、育んでいくための会になればと、期待しております。

どうぞご協力をお願いいたします。

はじめに大島扶美先生から、ご挨拶をいただきます。

扶美夫人の挨拶

本日は連休で御多用の中、故大島義彦を偲んで、御参会下さいまして、本当にありがとうございます。心から御礼申し上げます。

大島義彦は、私の夫ではありますが、それ以上に、医師としてどう生きるべきかを身を持って教えてくれた恩師であり、同志でした。

彼が最後に残した言葉をお伝え致します。胸水が貯溜し、意識がなくなっていました。が、一瞬意識が戻ったことがありました。在宅療養を望んでいた彼に、済生病院へ入院した経緯を話した時、すでに声は出ませんでした。急いでマジックペンを持たせましたとこ

ろ、力なく読み取りが困難な書体ながら、“わかった”少し時間をおいて“ありがとう”と書き残し再び眠りにつきました。

大島義彦の回りには、何時も素晴らしい人々が居りました。その方々が、彼を支えて下さった御陰で自由に生きることができたものと存じます。

“ありがとう”という言葉は、大島義彦と関わりがあった全ての人々に向けられたものです。本人に代り、心から感謝申し上げます。

本日はそれぞれの場で、それぞれの時間で、大島義彦と過ごした人生を思い起こしていただけたら幸いです。

平成17年 9 月18日

大 島 扶 美

黙祷の後、故人とご関係が深い方々に思い出を頂戴しました。



長年新潟水俣病患者への医療活動をされてきた、木戸病院健診センターの齊藤^{ひさし}恒 所長より

故人が学生時代に新潟地震の折等に、ボランティア活動をしていた様子や、新潟水俣病第二次訴訟で、患者側の証人として裁判に臨み、勝訴したことが紹介されました。（新潟水俣病裁判をめぐるという本書の部門で、格調高く、故人の活動を詳述して下さいました。）

秋田赤十字病院の宮下正弘院長より

大島君は、常に世の中に対して発言をし、提言をし、そしてそれを実行していた男です。何かあるとつくづく大島君ならどう考えるかなと思いつくと心境が語られました。

厚生労働省、保健局の麦谷眞里医療課長より

新潟大学医学部の整形外科のポリクリで、当時の大島講師から全てA評価をいただき、異例の良い先生？ と感謝したというお話。十数年後、山形県環境保健部での勤務時代にはスキー仲間となり、蔵王診療所のドクターパトロールの制服を着て、二人で「ごくろう様です。」と言われながら、リフトにフリーパスで乗り、楽しく滑った思い出が語られました。

麦谷先生は現在、診療報酬点数を決定される立場にあります。

この会の進行過程の最中に、重大発言をなされました。昨今、手術件数の多寡によって、病院毎に診療報酬点数が変えられるという事柄が取りざたされ続けておりました。麦谷医療課長として、「従来、診療報酬点数上で行っていた手術件数の少ない病院は、減算するという方式は本日をもって廃止致します。」と公式に明言されました。会場から思わず拍手と歓声があがりました。

聖隷浜松病院の手の外科マイクロサージャリーセンターの齊藤英彦センター長より

献杯の音頭を取っていただきました。

「彼が居たからこそ、今の自分があります。彼に感謝しております。ありがとうという言葉と共に、彼の志を後世に伝えてゆく役割が私達にあるのではないのでしょうか。」と話されました。

ここで大島義彦先生の在りし日のビデオ「親愛なる大島義彦先生」が映写されました。

山形大学医学部整形外科の渡辺好博名誉教授より

何故、新潟大学から山形大学へ大島夫妻を引っばってきたかについて話されました。

山形県立保健医療大学の広井正彦学長より

当時山形県環境保健部長をしていた麦谷先生と、初代学長予定者の小池先生と大島先生の、この3人が同窓の間柄にあり、現在の医療大学の前身の保健医療短期大学設立を盛り立ててゆかれたと話されました。

東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科の佐々木明子教授の言葉

研究や教育で新しいことを行おうと思うと、まず大島先生はやってみたらと言ってくれました。とにかくチャレンジしてみて、うまく行ったらそれでよいし、失敗したら又やり直せばよいと常に勇気を与えて下さいました。

そのチャレンジ精神が大島先生からの強い教えとなりました。

NPO法人山形県トレーナー協会理事長の皆川清彦様の言葉

大島義彦先生が最後につくられた団体が山形県トレーナー協会です。大島先生は、かねてから「トレーナーなくしてスポーツ医科学はない」とおっしゃっていました。大島先生は亡くなる数日前に、私の携帯に電話を下さいました。「今、僕は危篤なんだよ。…トレーナー協会のことをたのむよ」と。とぎれとぎれの言葉で言われました。大島先生の熱い思いを若いトレーナー達に伝えて行きたいと思います。

東北電化工業取締役社長 會津久次郎様の言葉

山形霞城ライオンズクラブに所属し、山形ダッカ友好病院の設立運営にサポートし続けてきました。山形ダッカ友好病院開設の時のセレモニーで、大島先生が1時間も全て英語で講演されました。実に感動的でした。

故人が心から信頼を寄せていた主治医 山形済生病院外科 瀬尾伸夫部長の言葉

年末に浜崎院長から肝臓に転移があるCTを見せられました。それが大島先生のCTと分り、これはどうしたらよいかととまどったものです。私が主治医として指名され、大変光栄に思いましたが、最終的には抗癌剤治療をして、少したいてから手術をすることになりました。3月に手術をしましたが、すでに肝臓に転移があり、癌性腹膜炎もあり、とり切れる状態ではありませんでした。そのあとも化学療法を続けられ、家庭にもどられ家庭菜園をされたり、良い時期を過ごされていたのではないかと思います。自宅での療養を非常に大切にされていたので。何度か自宅へ訪問させていただきました。その間、病状等全てお話ししました。きちっと自分の病態を把握され、感情を乱すことは一切ありませんでした。私が行っても、もてなしてくれるという気持ちが強く、硬膜外麻酔についても、こ

れはとても良い方法だから、他の患者さんにもぜひためしてみなさいと教えていただきました。私が主治医ではありましたが、逆に大島先生から教えられることの方が多かったかと思っています。治療を担当させていただいたことに感謝をしたいと思います。

私は学生の頃からお元気な大島先生にお世話になってきた訳ですが、ああいう形で病気がみつかり、大変さみしいですね。そういうこともあって、浜崎院長がPET/CTセンターを設立されました。大島先生の遺志をついで、癌の治療にたずさわってゆきたいと思っています。

山形県立保健医療大学看護学科の山田皓子教授から発言をいただきました。

大島先生はもっともっと羽ばたきたいんだな—とつくづく思います。山形大学看護学科に教授として移ってこられた時に、はじめて大島先生と出会いました。研究に行きづまって夜遅くまで研究室に居ると、秋空の流れ星を見に行こうよと丘の上につれ出して下さったり、ほたるを見につれて行って下さったり、メルヘンのさくらんぼ畑に、たべ放題のさくらんぼ獲りにつれて行って下さいました。研究をすすめる上での、心にゆとりをもたらせて下さいました。

林雅弘先生の言葉

医師免許をとりたての5月28日だったと思います。「君も医者仲間だね。午後から出張手術がある」と言って、古い古い昔の済生病院につれて行ってくれました。その日の手術は脊椎後方固定術でした。

大事なところは大島先生がやってくれましたが、「メスを持ってよ」と言われびっくりしました。この時から、大島先生の偉大さをつくづく感じております。後輩にも、大島先生が心がけた手術の手ほどきのあり方が受けつがれてゆくと思います。

新潟大学医学部で故人と同級生であり、現在新潟脳外科病院の病理部の小川宏先生（雅号、立冬）より

大島先生から猫の脊髄を取り出したので、そのセグメントを標本化してくれと言われ、協力させていただいたことがありました。とのこと。
—昨年葬儀の印象を俳句で詠まれました。

人育て トマトを育て 君逝きし 立冬

若者たち

1. 君の行く道は 果てしなく遠い
だのになぜ 齒をくいしばり
君は行くのか そんなにしてまで
2. 君のあの人は 今はもういない
だのになぜ なを探して
君は行くのか あてもないのに
3. 君の行く道は 希望へと続く
空にまた 陽がのぼるとき
若者はまた 歩きはじめる

空にまた 陽がのぼるとき
若者はまた 歩きはじめる

トロイカ

1. 雪の白樺並木 夕日が映える
走れトロイカ朗らかに
鈴の音高く
走れトロイカ朗らかに
鈴の音高く
2. ひびけ若人の歌 高鳴れバイヤン
走れトロイカかるやかに
粉雪けて
走れトロイカかるやかに
粉雪けて
(1 番、2 番くり返し)
3. 黒いひとみが待つよ あの森越せば
走れトロイカ今宵は
楽しいうたげ

山小屋の灯（ともしび）

1. たそがれの灯は ほのかに点（とも）りて
懐かしき山小屋は 麓の小路（こみち）よ
想い出の窓により 君を偲（しの）べば
風は過ぎし日の 唄をばささやくよ
2. 暮れゆくは白馬か 穂高はあかねよ
樺の木のほの白き 影もうすれゆく
さびしさに君呼べど 我が声空しく
遥か谷間より こだまはかえり来る
3. 山小屋の灯は 今宵も点（とも）りて
独り聴くせせらぎも 静かにふけゆく
あこがれは若き日の 夢をのせて
夕べ星のごと み空に群れとぶよ

山大整形外科の先生方をはじめ、若手の諸先生方が段上に上り、宮下先生のハーモニカ伴奏により、大きな声で若者たちが合唱されました。大島義彦先生のお耳にも届いたことでしょう。

その後、宮下先生のリードで故人が好きだった山小屋の灯やトロイカが全員で唱われ、心が一つになりました。

エクラスル ラーマン先生からFAXで偲ぶ言葉が届きました。

Professor Yoshihiko Ohshima-My Gratitude, My Remembrance

Md. Ekhlashur Rahman

For the ever first time, I met Prof. Ohshima in Japan, in the very first day of my Yamagata life. I could even remember that I took my first meal in Yamagata at his residence, which I can never forget.

His thought, sensibility, knowledge, perception, ideology and imagination attracted me very much because that can fulfill the demand of any human being's mind and soul. He never thought of himself, he always thought to do something involving everyone and also tried to find out the ways and process for the betterment of everyone. His prime characteristics was to search how he can respect a patient, a doctor, and above all a human being and make them happy. His effort and endeavour was to disseminate his knowledge and ideology to the others.

It was impossible to imagine of establishing YAMAGATA DHAKA FRIENDSHIP HOSPITAL in Bangladesh without professor Ohshima. His repeated and untiring effort was to improve the quality of care for the patients in Bangladesh and he always tried to explore the pathways how he can make the Bangladeshi doctor's competent, both in terms of technically and technologically.

And last of all, I would like to say that the "YAMAGATA DHAKA FRIENDSHIP HOSPITAL" in Bangladesh is the symbol of all his efforts and dream.

閉会のあいさつ

皆様、本日はお忙しい中、父・大島義彦を偲ぶ会にお集りいただきまして誠にありがとうございます。

私は大島義彦の長男で、大島裕紀と申します。

埼玉医科大学を'96年に卒業致しまして、以後埼玉医大の神経内科で研修を積んでおりました。

2年9ヵ月前の12月の頃でしたが、次男の啓悟から「お父さんがガンだ」と、バイト先の病院の方で携帯で聞きました。又父からも、こちらの実家で運営している悠愛会という法人で、親父がガンになってしまったので、人員が足りないのので来てくれと言われまして、こちらの方に戻ってきました。

今、こちらの老人保健施設「あこがれ」、クリニック「あこがれ」という施設で仕事をさせていただいております。

まず、この場をお借り致しまして、今回の企画「偲ぶ会」、それから追悼・遺稿集作成を強力にすすめていただきました山形済生病院の浜崎先生、御司会をお願いさせていただきました佐本先生、それから又、山大整形外科の諸先生方その他今回の企画に御尽力いただきました方々に遺族を代表致しまして厚く御礼申し上げたいと存じます。

早いもので、父・大島義彦が亡くなってから2年余りが経つわけですが、実は、私自身、まだ父の死というものを、もちろん実感できない訳ではないのですが、何と言いますか完全に消化しきれていないといった感があります。

意外と思われるかも知れませんが、父は新潟水俣病やインターン制度の問題について家庭の中では全く話したことがありません。そんなこんなで私は、父の全体像がまだ、つかめておりません。もしかしたら、母親しか分らないのかも知れません。

私にとって父というのは父親でもありますし、偉大な師でもあります。又皆さん御存知のとおり、一種のビジネスマン的なところもございます。教育者でもあり、ある意味で思想家・哲学者であり、一面、社会運動家でもありました。ある部分では、自宅では趣味の農業を行う農家でもあり、本当に多方面の存在でありました。

この様な父を支え続けて下さいました御友人、御同僚、その他全ての皆様に感謝致します。そして又、本日ここに御参席いただきまして本当にありがとうございました。重ねて御礼申し上げます。

長 男 大 島 裕 紀